桃の花咲く山辺の道

山の辺の道あたりは、「大和朝廷の発祥の地」とされています。ここから出土する土器は、西は朝鮮半島から南九州、南関東に至る日本列島各地から集まっています。山陰、三陸、瀬戸内、河内、近江、南関東、東海地方、朝鮮半島の土器が数多く出土しています。三輪山のふもとにある巻向（まきむく）地区には卑弥呼（又はその後継者トヨ）の墓ではないかとされる箸墓（はしはか）古墳があります。平成二十二年の発掘調査で纏向に大型建造物（王の館）跡が発掘され、邪馬台国が大和にあった有力な証拠だと色めき立ちました。発掘された桃の種二七六五個や、銅鐸の破片は古来の神を廃し、鬼道（道教系）に使えて連合国家をまとめた卑弥呼の王国の証拠になるとされます。山辺の道沿いには桃の花が多く咲きます。

三輪山と邪馬台国
想定地の纒向遺跡

山の辺の道を歩くと「ここは、まさしく大和だ！」と感じる場所が多くありますが、「大和朝廷の発祥の地」であり、そう感じるのは当然かもしれません。この絵は景行天皇陵横の山辺の道から描きました。桜井市の三輪山は出雲系の神様。出雲が大和に国ゆずりをしたり、三輪山の神が疫病で祟ったりという大和と出雲の葛藤の話が多く伝わるのは古代にこの地にいろいろなドラマが展開したのでしょう。ここにある、箸墓（はしはか）古墳は毎夜、通って来る三輪山の神様が本当は白蛇であることを知ってしまい、驚いて尻餅を突いた拍子に箸で下半身を突いて死んだとされる大倭百襲姫（ヤマトトモモソヒメ）の墓で、彼女が女王卑弥呼、又は後継者のトヨであると言われる。

談山（たんざん）神社の紅葉

住所　桜井市多武峰３１９
電話　０７４４　４９　０００１
紅葉（十一月末～十二月初旬）

談山神社は車で行くなら桜井から入りますが吉野方面からだと二十分程度で新しく出来たトンネルをくぐるとすぐです。飛鳥からのハイキング道もあります。中大兄皇子と中臣鎌足は、南淵請安（みなみぶちのしょうあん）の塾で学びました。その行き帰りに乙巳（いっしの変＝大化の改新）の計画を相談したといいます。

学者であり僧侶でもあった南淵請安は、六〇二年に遣隋使の小野妹子に同行して三十数年間も大陸ですごし、六四〇年に帰国しました。大陸滞在中に隋の滅亡と唐の興隆を目の当たりにして、隋や唐の進んだ学問を伝えましたが請安自身は大化の改新以前に死去したものと考えられています。ひとつの時代が終わるには明治維新のようにその底流に大きな思潮の変化が起こりますが、古代でもそれは同じだったようです。その時代を先導する精神的なリーダーがいつの時代でも存在したということなのでしょう。

大化の改新の密談の場所・談山（たんざん）神社

談山神社の秋は、赤い十三重の塔は紅葉の中で一段と映えて美しい。明日香の住民は、多武峰（とうのみね）の山に特別な愛着を感じるそうですが、中臣鎌足と中大兄皇子が大化の改新の密議をしたという談山神社はこの多武峰の山中にあります。「多武峰縁起」によれば、飛鳥法興寺の蹴鞠会で中大兄皇子に近づいた中臣鎌足が中大兄皇子を誘い、談山神社裏山で蘇我氏打倒の密謀をめぐらしたといいます。鎌足の死後、遺体は摂津三島の阿威山（あぶやま）に葬られましたが唐から帰国した長子の定慧が多武峰に改葬し、十三重の塔を建てて「妙楽寺」としたのが談山神社の前身です。神社になったのは神仏分離令後の明治以来のことです。

談山神社の紅葉

山辺の道を行く

大和には山の辺の道、葛城古道、竹の内街道、など、古代から開けた道が多い。山辺の道は日本最古の街道と言われます。このあたりの古墳群に葬られている天皇は、大和朝廷スタート時代の天皇です。記紀（古事記・日本書紀）で初代天皇とされている神武天皇と、第十代の崇神天皇は、二人とも「ハツクニシラススメラミコト（最初に国を治めた天皇）」という別名があります。ハツクニシラススメラミコトが二人もいるのはおかしいのですが、崇神天皇は実在の人物です。初代神武（じんむ）天皇以下の存在の根拠に乏しい天皇達は何らかの事情で正しい記載ができなかったのだろうと言われます。日本書紀サイドの系統の王族が滅ぼした相手の王族の名前をはっきりと明記できなかった為、神話に託したのではないかという見方をしているのですが、卑弥呼の記録が中国にあるのに日本にないというのも同じ理由かもしれません。

鍵・唐子遺跡

場所　田原本町平田
電話　０７４４　３２　２９０１
（田原本教育委員会文化財保存課）

天理から明日香への途中、左側にユニークな形の楼閣が見えて来ます。平成三年に、ここから楼閣が描かれた土器片が出土し、紀元一世紀の時代に大陸文化を採り入れた建築物があったことを証明する資料となりました。これをもとに池のほとりにこの風変わりな塔が復元されました。広い駐車場があり、時々人が訪れています。中国の魏志倭人伝には卑弥呼の宮室は「楼観、城柵を設け・・・」と記されていますが、邪馬台国の有力な候補地の纒向遺跡はここからすぐ近くの位置にあります。九州の吉野ヶ里遺跡の楼閣にもよく似ています。古代の鍵・唐子遺跡は河内や伊勢湾岸地域とも川や陸上交通でつながっており、天竜川流域や岡山県南部の土器も出土しています。東西の物資流通の中心で四世紀の大和に邪馬台国規模の大きなくにがあった有力な証拠となりました。

鍵・唐子遺跡

三輪から見た二上山

大和(奈良)の地と、河内（大阪）を分ける国境の二上山は大和の人たちにとって特別な山。大和の東から西を見ると二こぶ駱駝のような山が見えますがこれが「にじょうさん」とか、「ふたかみやま」などと呼ぶ二上山です。古代の人々は、日の出の三輪（みわ）山には誕生や生を、落日の二上山には、浄土や死を感じていたそうです。當麻寺の中将姫が二上山の夕日の中に阿弥陀如来が現れたのをみて曼陀羅にしたという當麻寺のご本尊の蓮糸曼陀羅の話を聞いて私も山辺の道の三輪山のふもとの景行天皇陵辺りから西の方を拝み、二上山を描きました。折しも赤い夕日が二上山の裏へ沈んでいくところで大変感動しました。